
魔法少女リリカルなのはvivid IXAS

楊森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはvivid IXAS

【Nコード】

N8871K

【作者名】

楊森

【あらすじ】

Strikers? After.

時間軸はStrikers?から1年後。（正確にはvivid）

JSのラボの奥深くで、一つの生体ポッドに異変が！

オリジナルストーリーで描く?から1年後のエースにストライカー達です。

魔法少女リリカルなのはIXAS、ドライブ イグニッション！

打ち切りです。

ブローグ

ピシッ！ ピシピシ！ パリ〜ン！
シャ〜、ドサツ！

急にJSのラボ奥深くで、生体ポッドに罅が入り始め全体に広がる
とポッドは砕け、中の人間？が外に放り出される。

「フフフ、フハハハハ、やっと回復したぜ……えっと服はと……確
かここら辺に入れた様なっとなった有った！」

ガサツゴソツ！

「ふう、腹が減ったがそれは後回しだ……外の状況はどうなってい
るのかなっとな……出たな」

少年は服を着ると、手元のキーボードを操作して画面コンソールを
呼び出す。

「えっと何々、マリアージュ事件が1年前に起こってるな……マリ
アージュか、確か冥王の意志とは無関係に造る死人兵器だったな」

かつて数度戦った死人兵器を思い出す。

「事件の担当者はティアナ・ランスター執務官か……JS事件のフ
ォワードだったな」

案外、大きなロストロギア関係の事件はマリアージュ事件を最後に
起きてないな。

「……確か此処に保存がきくレーションが有ったはず」

ガサッゴソツガサッゴソツ！

そこら辺の棚をあさってレーションを探す。

「有った、有ったとっ、乾パンは此処を出た後に食べるとして缶切り、缶切り」

カリカリ！

「いただきます」
パクっ！

「うっ！ 相変わらず不味いな、これ……まあ、無いよりはましか」
そう言いながらレーションを食べる少年の目は両目の色が違うオッドアイだった。

老章……遭遇、（前書き）

久々に投稿……モバゲの新規に移植したぜ

竜章……遭遇、

三日後…

「着いたぜ、首都クラナガン！」

能力でJSアジトから来ました……ばれるとヤバいから迂回してきたから、時間掛かったな。

「さてと、まずは腹ごしらえだな……うん？」

これはマリアージュの反応か？ 全部破壊された筈だが、行って見るか……あっちだな。

マリアージュの反応がする方へと足をむけ、走り出す。

「あれだな、うん、あの子は！？」

マリアージュに襲われていたのは、高町ヴィヴィオ……聖王のゆりかごの起動キーとして造られた彼女だが、JSが逮捕された今は、高町なのはの養女となった少女である。

「うつわぁ〜最悪だな……会つのはもうちょい先の筈だったんだけど助けなきゃヤバイよな」

右手に聖天の書を掴み、空に掲げる。

「エリカ、Set・Up!」

次の瞬間、赤色の騎士甲冑を身に付けていた。

「さっさとバラすか」

ビルの壁を蹴り、ヴィヴィオの元に向かう。

「マ、マリアージュ!？」

一年前の事件で友達になった子が作り出してしまふ兵器、全てスバルさん達が破壊した筈なのに…。

「全て破壊されてなかった!？」

「イクスヴェリアサマハ、ドコニオラレル」

「あなた何かに言わない!」

「ナラバ、シネ」

右手の変じた鎌があたしに振り下ろされた。

「残念ながら、君はイクスには会えないよ……此処で壊さして貰うからね」

あたしに向かつて振り下ろされた鎌は突然現れた騎士？の人が両腕の盾で止めていた。

「ナ、ナニモノダ!?」

「通りすがりの騎士だ、覚えておけ!」

そう言っつて、手刀で止めていた鎌を弾いて、腕の根本から切断する。

「管理局が来る前に終わらせる……後ろに下がって」

そう言っつて、マリアーヂュを蹴っ飛ばす。

「まだ本調子じゃないからね!」

下段から斬り上げながら、蹴りを加えて、斬撃と蹴りをマリアーヂュに叩き込む。

「す、凄い」

「ラストだ、> ^{トゥカ}十拳<!」

開いた距離を詰め、正拳突きでコアを破壊され、マリアーヂュは骸骨を残し消え去る。

この騎士は一体誰なの?

「……………亡者に永遠の安息を」

剣を背中に収め、胸の前で十字を切る。

「あ、あの！ 貴方は誰ですか？」

少女は自分を助けてくれた仮面の騎士に正体を聞く…無論…。

「通りすがりの騎士だ、覚えなくていい」

あっさりと追及は躲される…しかし…。

「ならアタシが覚えてやるよ！！」

直上から怒声が聞こえ、上を向くと帯状の魔方陣から赤髪の少女が拳を振り下ろす。

「ちっ！」

振り下ろされた拳を躲し、一旦距離をとる……そして後ろから声が掛かる。

「貴方ですね、市街地における攻撃魔法、飛行魔法の未許可使用で逮捕します」

前門の虎、後門の狼か…。

「ナンバーズ5のチンク・ナカジマに、ナンバーズ9のノーヴェ・ナカジマか」

「知ってるってことは、裏の奴か！！」

「残念ながら違う……そろそろヤバいからな、ここは退かせてもら

「うよ」

パチン！

騎士が指を鳴らすと、風と羽根が舞い上がり、姿を眩ます。

「なっ！」 「くっ！」 「きゃあ！」

「……また何処かで……」

消えるような声で、別れの挨拶を述べ、姿を消す……ヴィヴィオの手にメモリチップを残して…。

「あのチンクさん、これ」

「メモリチップ!? 何のメモリかしら?」

「中身を確認する?」

「そうね、確認して、ノーヴェ」

「うん……これはさっきの戦闘データ……嘘だろ!？」

「どうした、ノーヴェ?」

「チンク姉、これを見て」

震えた声で、手元のコンソールを操作して画面を出す。

「んっ！ これはマリアージュ!? 全て破壊された筈の兵器が何故

存在している!？」

「イクスちゃんが目覚めないから、もうマリアージュは製造されない筈なのに」

「彼は何かを知っていた? だから破壊した?」

「じゃあ、探さなきゃなヤバイよ!！」

「無理だな、サーチして貰ったが、範囲内から反応は消失、追えない」

「ちくしょ!! 何なんだよ、あの騎士はよ!!」

「騎士?」

「あの仮面の奴が、そう言ってたんだよ!」

「うん、アタシも聞いてた」

「アンノウンは騎士と、騎士ってことはベルカ式?」

「いや、そもそも魔法陣が出てないから分かんない」

「魔法体系・目的は一切不明、謎の騎士か、一体何者かしら」

「……ただの化け物さ……」

実はこの会話、特殊転移で消える直前に残していったある物を通して、丸聞こえである。

.

式・・・・・・・・ロストロギア

数週間後：

「あれ以来、マリアージュの出現は無しか……この近くでロストロギア反応！……どちくしょうが！！」

能力でクラナガンを周り、マリアージュの反応を辿るが最後の一機だったのか反応は無しな所に、ロストロギアの反応……厄日かよ。

「見に行つて見るか」

チャリの行き先をロストロギア反応が有った方向に向ける……市街地の中へと……。

「あそこか……ちつ、火事か！」

チャリで駆け付けると、ロストロギア反応の有った場所は大型デパートであった……ロストロギアの性か火事が起こっているようで、正面の入り口から人が急いで外に出て来ている。

「大丈夫かな、>サーチ<」

一応、中の生体反応とロストロギア反応を探る。

「ちつ、最上階付近にロストログア、その近くに生体反応か……湾岸救助隊が来るまでは無理だな」

辺りを伺い、火災を起しているデパートの正面にあるビルに視線を向ける。

”あのビルなら丁度良いな”

ビルの非常階段で屋上まで上がり、デパートに視線を向ける。

「聖天の書、Set・up!」

赤色の騎士甲冑で身を固めた騎士が姿を現す。

「さてと行くかな、紅蓮斬!」

右腕の手刀に集めた魔力を砲撃として窓に放ち破壊する。

「よし、>ハイペリオン<」

イクサは宙に円状の足場を作り、その上を駆け、さっき壊した窓からデパートの中に突入する。

「ちつとばっかし、熱いな……早く見つけて出ないとこっちまでお陀仏だぜ……見付けたな」

「行くぜ、ブラッディダガー!」

紅の魔力弾を放ち、着々と障害物を排除し、生体反応に近付いていく。

「……………っ、居たな、おい大丈夫か？」

「ひっ、誰ですか！？」

熱や煙にやられて、大分衰弱してるな……………っ、ロストログアは後回しだな。

「助けに来た、もう大丈夫だぞ」

「……………ありがとうございます」

「礼は此处を出てからだ…」

ヤバいな、火の手が回り掛かってやがる、なら！

「ちょっと、我慢してくれよ、《ダイナミックエース》！」

集めた魔力で砲撃を放つと、紅きA字の弾丸が走り、障害物を全て打ち抜く。

「掴まってね、>ブースト<！」

ブーツに取り付けられた噴射機が稼働し、加速力を手に入れ前に進む。

障害物を瞬く間に背後にして、窓から外の道路に着地する。

「あつ、てつめえはこの間の！」

うつわあゝややこしい奴がいやがった……さつさと上に行くかな。

「>ハイペリオン<！」

ハイペリオンを使用して、窓から中に入り込み、ロストログア反応の有った方へと向かう。

「確か、あつちからだったな……つと、魔法の射手、連弾・火の10矢！」

障害物は排除、熱や煙はフィールド魔法で防御してロストログア反応に向かう。

「有った有った……こいつは持ち主に火炎操作能力を与えるロストログア>緋炎の剣ヒエンノツルギ<だったな、何で封印処理もされずに表の世界に？……ともかく封印だな>カテナショット<」

黒い封印弾をセレクトして放ち、剣に命中する。
命中した黒い弾丸は一瞬で、黒い鎖へと姿を変え剣に絡み付き、封印する。

ロストログア封印弾カテナバレット…黒い弾丸で、ロストログア封印時は黒い鎖へと変化し、封印する

「どうして、>緋炎の剣<がこんな処に……待てよ、確か此処は…
…ちつ、そういう事かよ！こりやさつさと出なきゃな、>ブースト<」

イクサは、マリアージュの出現した場所とロストロギアの発動した場所から何かを推測し、答えに至り、行動を起こす前にデパートから出る。

「よつと、着地成功……さつさと引き渡して逃げるか」

「待ちやがれ、仮面の騎士!!」

「お前はこの間の……はあゝ、何の用だよ、こっちはこれからすることがあるのに」

俺の行動に待ったを掛けたのは、マリアージュの時に殴り掛かってきたノーヴェだった。

「てめえを叩きのめして捕まえる」

「パスだね、それよりコレをやるよ、ほれ!」

右手に持っていた>緋炎の剣<をノーヴェに投げ渡す。

「おつとつと、何だよこの鎖でがんじがらめの物体は?」

「火災の元凶、ロストロギア>緋炎の剣<ちゃんと引き渡したからな」

「ロストロギア!？」

「因みに封印は応急であるから、ちゃんと封印して貰えよ」

「はあゝ? >ジュ<ウ<熱々、熱い!」

「ちゃんとした封印しないと、異常発熱するぞ、じゃあな」>パ
チン！<

指を鳴らすと羽根が舞い上がり、姿を掻き消す。
羽根が無くなると少年は別の場所に立っていた。

少年は騎士甲冑を解除すると、胸ポケットから端末を取り出す。
「さてとあるかなつと」

やっぱりか……あとデパートは地上本部から南に、マリアージュは
北東に、二週間前には北西で、それぞれロストログアが発動してい
る。

「次は西か、東南か、南西だな……賭けで西だな、まずはチャリを
取りに戻ろう」

「うわぁ、野次馬が多いな……チャリ、チャリ……と、有った有
った」

自分のチャリを起動して、乗って行こうとすると…。

「おい、そのチャリお前のか？」

「ああ、そうだが（げっ、ノーヴェ！ 運が良いのか悪いのか）」

「それなら悪かった、こう野次馬が多いと置き逃げみたいにチャリ

とか持つてく奴がいるからよ」

「大変だな、じゃあ俺はこれで」

「ヘルメット被れよ！」

「そうだな」

明後日の方向を向いて、目を見せないようにヘルメットを被る。

「なあ、お前さ、顔を隠してないか？」

「そうだが、それがどうした」

フルフェイスのヘルメットごしに、ノーヴェを見る。

「顔を隠した奴は、あんまり信用しないようにしてるからな」

「そりゃどうも、じゃあな！」

話を切り上げ、さっさとバイクで走り去る。

次の目的地は地上本部から西の地域一帯だ。

参・・・・・・・・邂逅2

一週間半経過...

今のところは目立ったロストロギア反応は無いな。

「畜生、勘が外れたか？」

まあ、それでも移動手段はあるから、此处で張ってるかな.....うん？」

「ヴィヴィオちゃん、お待たせ」

「じゃあ、行こうか」

ヴィヴィオじゃないか、隣の女の子はクラスメイトか.....俺が言うのも何だが、幸せそうだな。

「さてと、どうするかな、これがr>ドゴン！<ってマジかよ!？」

いきなり、土の柱？が目の前の地面から発生する。

「ちっ、ロストロギア反応が無いのに、何故!？」

「キャアアア!」 「うつわあああ」

彼方此方で同じように土の柱が、地面から発生し、周りの人々はパニックに陥る。

「クリス、Set Up!」

> Yes , Set Up . <

ヴィヴィオの姿が10代半ばの姿に変わり、上は白下は黒のエースオブエース風のバリアジャケットを着る。

「コロナ、リオ、掴まって!」

「ありがとう、ヴィヴィオちゃん」

「ありがとう」

「しっかり掴まってね」

腰に二人を掴まらせて、飛行魔法を行使するが、直ぐ目の前から岩の束が迫る。

「避けられない!!」

「<ダイナミックエース>!!」

……が紅きA字の閃光がその束を貫き破壊する。

「えっ、誰が……!?!」

閃光が飛んできた先には、剣を構え、赤色の騎士甲冑で身を固めた仮面の騎士が立っていた。

ふう〜危ねえな、飛行魔法を行使してもある程度近付くと自動攻撃かよ、それにさっき別の束に放った魔法の射手は効いてないか。

「マジで八方塞がりかよ、さっさと本体のコア見付けて封印する以外、手は無しかよ」

「あゝの〜？」

「うん！何？」

「助けてくれて、ありがとうございます！」

「わざわざ、どうも……ちっと聞くんが、封印魔法使える？」

「……………スミマセン、修行中です」

「そうか、なら力押ししかないな……………ブラッディダガー！」

「クラナガン西区でロストロギア反応、発動しています！！」

「何だって、急いで近くの陸士部隊に連絡、至急出動するように通達して！」

「無理です、道路は全てロストロギアの影響で寸断されて、とても近寄れません」

「ロストロギア反応中心地にて、高魔力反応！ モニターに出します」

「何だ、これは！？」

モニターには次々に地面から生えてくる岩の束を、破壊していく仮面の騎士が映っていた。

「破壊している、でもあれは再生しているのか？」

岩の束は破壊されても（タイムログはあるが）次々に元形＋別方向に束を生やして再生していく。

「ど畜生っ！次から次へと元に戻りやがって！！」

次から次へと、生えてくる岩の束に業を煮やす。

「仕方ない、あいつを召還して蹂躪するか、サーチ開始」

探查魔法を発動して周囲を探り、暫くして、探查の結果がかえって来る。

「ちつ、周りに頑丈そうな束が生えたあれにコアが有るのかよ……
…仕方ない、使いたくなかったが、『さて汝は契約を破り、世に悪をもたらした。主は仰せられる。――咎人に裁きをくだせ。背を碎き、骨、髪、脳髓を抉り出し、血と泥と共に踏み潰せと。我は鋭く近寄り難き者なれば、主の仰せにより汝に破滅を与えよう』さあ出でよ、ベヒモス！」

頭上に三角形のベルカ式魔法陣が出現し、其処から黒毛の巨体……猪が出て来る。

「『猪は汝を粉碎する！猪は汝を蹂躪する！』」

黒毛の猪は咆哮を揚げると、その巨体に見合わない速度で岩の棘を次々に粉碎し、蹂躪する。

再生する棘も猪には抵抗にならず、再生する傍から破壊されていく。決着が着くと、辺りは岩が散乱していた。

「封印した!？」

「否、まだまだ、これで封印だ、>レストリクトロック<」

魔力弾に封印魔法を付与して、コアに放ち完全に封印する。

「万事……解……決……ヤバ……い、眠……く……なっ……t……」

「えっ、ちよつと!？」

「大丈夫です、魔力切れでぶっ倒れただけですから、一日程寝れば起きます」

「あの、誰ですか？」

「これは失礼しました、私は彼の相棒の《エリカ》と言います、以後、お見知り置きを」

「どうも、ありがとうございます」

「管理局の方も来られましたね、さて、マスターをどうしましょうか？」

「じゃあ、家に来る？」

「お邪魔で無ければ、宜しく願いします」

「お邪魔じゃ無いよ」

この後、管理局員が到着。

少年は事情聴取と重要参考人のため、聖王系列の病院に収容。

ヴィヴィオ達は事情聴取だけなため、保護者が来るまで現場で引き止められた。

アーシー（無限書庫の資料より、正式名が判明）のコアは、厳重に再度封印され、地上本部のラボへと移送。

セブンは証拠物件として少年から押収、技術局にてデータの引き出しが行われる予定。

肆…………援護と断罪と…………これから

…二日後…

「……………う、うつん？」

知らない天井だな、聖天は無しか、魔力切れでぶっ倒れたか。

「これから、どうするかな？」

「起きたみたいだね、初めまして、私は「フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官、ＪＳ事件の折に主犯ジェイル・スカリエツティを逮捕した事等で有名、異名は金色の死神……間違ってる事は？」無いよ」

「それはどうも、聞きたい事は俺の出生、それか首都で連続発動しているロストログアの事、それとも両方？」

「先ずはロストログアの件ね、何故二回も発動現場に？」

「一回目は偶然、二回目は予測立てたら発動しただけ…以上」

「貴方は何者なの？」

「ごめん、ちょっとストップ、飯食わせてくれない、何も腹に入っ
て無いんだけど」

「あつ、ごめんね、ちょっと頼んでくるから……逃げないでね」

逃げねえよ、聖天も無いのに……さて、出生をどう誤魔化すとしよ

うかな。

数分後……

「おかわり！」

「もう無いよ」

「そうか、久々に旨いの食ったからな」

「今まで何を食べてたの？」

「レーションとか乾パンとか、保存食だな」

「何でそんなモノばかりを？」

「喰えるモノは保存が利く保存食ばかりでな、他は腐ってた」

>フェイトさん、大変です、ガジェットが出現しました、それも大量にです！！<

「どういう事なの！？」

>分かりません、地上本部に八方から進行中です、まるで地上本部壊滅の再現です<

追々、マジかよ、仕方ないな。

、エリカ、今すぐ其処から此処に来れるか？、

、行けます、マスター、

「聖天の書、S e t U p」

>「えっ!?!」<

「失礼しました、それじゃおさらばです」

「ちょ、ちよつと待って!」

執務官の制止も聞かずに窓を蹴破って飛び出し、飛行魔法を行使して首都に飛び去る。

「アイツは、必ず俺が潰す!!」

数分後…首都にて

「数が多過ぎるな、でも108部隊は善戦してるな、エリカ、クオレ・デイ・レオーネとイル・マエストロだ」

「了解、クオレ・デイ・レオーネ、ル・マエストロ」

右手に細剣のクオレ・デイ・レオーネ、左手にサーベルのル・マエストロが現れる。

「近場から加勢するぞ」

「了解、マスター」

眼前から空と雲が消え、代わりにビル街とガジェットが現れる。

「さてと、ぶっ潰すぜ！」

次々に近くのガジェットから斬り倒していく。

「す、凄い」

「元六課メンバー並だぞ」

「こらっ！ 援護位はしやがれ！！」

「わ、わかりました、全員であの少年を援護だ！」

『了解！！』

後ろからの弾幕が減ったため、喝を入れて再度ガジェットを減らしていく。

数分後：

「ラストッ！」

最後のガジェットを斬り破壊する。

「次はあっちか、うんじゃ、さいなら！」

さっさと近場で苦戦している処に移動して、ガジェットを破壊していく。

さてと、これでガジェットは全部潰れたな、後は奴だけだ。

親玉が居ると思われる場所に移動する。

其処は、かつて時空管理局が演習場として使用していた区画、老朽

化で廃棄され近寄る者はいない。

「出てこい！ 此処に居るのは分かってるんだ、バイダース！！」

「オレヲゾノナデヨブナ！！」

金髪で所々にラインがある黒いスーツで全身を覆った男が瓦礫の下から這い出てきた。

「出たか、かつて管理局の闇によって行われた人体実験によって、人の心を失い、狂気に刈られた亡霊、バイダース」

「ガンリギヨグ、ズベデツブズ！」

「悪いが、アンタの遣ろうとしている事は見逃せないのね、アレは下手すれば全世界が滅んじまう、アンタを倒す！」

「ヴルザイ、ジネ！」

「古代ベルカ、東方の騎士、イクサ・D・ゼーゲブレヒト、参る！！」

「マツブダツニナレ！」

バイダースは右手首からを両刃の剣に転換して、イクサに斬り付ける。

一合、二合、三合と、刀と剣がぶつかり合い、凌ぎを削り合う。

十数合に及ぶ打ち合いに勝利したのは……。

「>鉄一閃クロガネイツセン<！」
ガキッ！

一瞬で、双剣に魔力を纏わした一閃で右手の剣を付け根程から断ち切る。

「オノレ、ナラバゴレダ、>ジールドブリッド<!!！」

バイダースの背後から、楕円形の盾？が射出され、イクサに襲い掛かる。

やはり、ロストロギア、インジェクトコア、を埋め込まれているな。だが、貴様の能力は全てお見通しだぞ。

「スーシン、鳳！」

「了解、」

「グジザジニジデヤル！」

四方八方から楕円の盾が迫る中、イクサはただ立ち尽くす。

「ジネ!!！」

「悪いな、その技は見切っている」

バカッ、バカッ、バカッ!!

盾同士がぶつかり合い次々と砕けていく。

「ワダジノダデガガラズミダイニグダゲデイグ」

「バイダース貴様の盾は馬鹿みたいに硬い上に、目標を正確に追尾する……なら盾同士でぶつかり合えばどうなる？」

「……………」

「答えられないか、同じスピード、同じ硬さ、行き着くのは今みにバラバラになる事だ」

「……………ミ……………ナ……………ミドメナイ、ミドメナイ、ミドメナイ！！
オレヲゴンナズガダニジダヤヅモオマエモミドメナイ！！ヴォオオオ
オオオオオ！！」

バイダースの怒声が瓦礫の山に響く中、バイダースの右手が再生、雷が集まっていく。

その姿はやがて異形に変化する。

「身も心も化け物に成り果てたか、ならば、永遠の眠りにつけ！」

「『我は最強にして、全ての勝利を掴む者なり』」

身体ははちきれんばかりに肥大化し、人とかけ離れた異形の姿へと変貌したバイダースに別れを告げ、宣誓の言葉を告げる。

「ヴルザイ、ジネ！！」

雷を纏った巨大な拳が振り下ろされる。

「『人と悪魔――全ての敵と、全ての敵意を挫く者なり』」

数多の金色の剣が具現化し、バイダースを囲み、その内の一本を掴む。

「星皇流剣術奥義の一、飛燕閃！」

振り下ろされた拳に先ずは一閃、手首を返してがら空きの胴に一閃、もう一度手首を返して逆上げの一閃、これを一泊の呼吸の内に行う。

もつとも有名な別名、燕返しであるが、あれは良くて二閃まで、これに名称するなら、燕返し・極、である。

「オ……ノ……レ……」

「まだ生きてるか、ならば仕方ない、塵も残さず消え失せろ！！」
我が元に来たれ、勝利の為に。不死の太陽よ、我が為に輝ける駿馬を遣わし給え。駿足にして靈妙なる馬よ。汝の主たる光輪を疾く運べ！！」

東の空から曙光がさし、太陽の白炎が眼前の巨悪>バイダースくを飲み込み、塵へと帰す。

「神の御下で永遠の眠りと安息に在らん事を」

胸元で十字を切り、神のご加護を願う。

「さてと、これからどうするか？」

「はい、ちょっと待ちなさい……武装を解除して、両手を上に挙げなさい、おかしい真似したら射つわよ」

「エリカ、Mode Release」

「Yes, Master」

セブンを待機状態のペンダントに戻し、両手を上に挙げる。

「ともかく、最寄りの陸士部隊でこれまでの経緯その他諸々、全てはいてもらうからね」

「了解だ、ティアナ・ランスター執務官殿」

「聞きたい事は？」

「まずは名前、イクサ・D・ゼーゲフレヒトと名乗ったけど本名？」

「本名ですよ、ほら」

両目に入れていたカラコンを取り、両手を見せる。

「確かにヴィヴィオと同じ色ね、なら、貴方も人造魔導士ね」

「違いますよ、自分は体内に埋め込まれたロストログアの影響で老化してないだけです、歳は見掛けより上ですよ」

「老化はこれからもない？」

「しませんよ、もう壊れてますから、普通に歳はとりますよ」

「次は貴男が殺したあの人物について、あの人物は貴男が話した通りの人物？」

「ええ、そうです、彼は……バイダースは十数年前に管理局の闇によつて人体実験の被験者にされました、その性で人としての姿を失い、やがて心も失いました、彼を動かしていたのは管理局への復讐心と怒りです」

「何時、彼の存在を知ったの？」

「確証を持ったのは、数週間前ですね、彼がしようとした魔法の正体もその時に」

「このままでは世界が滅びると言ったけど、あれの意味は？」

「専門的な話を省くと、この世は四つの元素で構成されてます、しかし彼が遣ろうしたのは、元素の逆転……リバーズです」

「リバーズ？」

「通常、四つの元素はある程度循環します、しかし、この循環を逆転させると、悪影響を及ぼし、あの世がこの世に顔を出します」

「なっ、そんな事が!？」

「もし成功していれば、やがて全ての次元世界があの世に飲み込まれます、ギリギリ結界が間に合つて良かった」

「そう次に聞きたい事は、これからどうする？」

「気の向く儘に、風の吹く儘に、次元世界でも旅しますよ」

「その事だけど却下だよ」

「なのはさん!？」

「久しぶり、ティアナ、イクサ君だっけ、身元保証人の高町なのはです、家に来てもらう事になったけど良いかな、ヴィヴィオも会いたがってるし」

「俺は構いませんが、事情聴取がまだなんですが？」

「もう良いわよ」

「軽! ! ってもう良いんかい! !？」

「さっき上から通告が来たのよ、速やかに彼を解放しなさい、って、で一応形式的にいただけ」

「あたしもビックリだよ、いきなりミゼット統幕議長からの連絡だったし」

「ミゼット?もしかしてミゼット・クローベル？」

「そうだよ、知ってるの？」

「昔の戦友だ、しかし何故今？」

「それは貴方の処遇についてよ、イクサ」

「ミゼット、大分老けたな」

「はい、貴方のよ」

「うん、何々、時空管理局本局所属嘱託魔導士、高町イクサ、って、おい、これは!!」

「ついさっき、正式に高町一尉にも頼みました、イクサ、そろそろ重荷を降ろしたら」

「へいへい分かったよ分かりました、良いのかよアンタは？」

「私は良いよ、イクサ」イクサだ、息子なら呼び捨てにしろ、イクサ、よろしくね」

「こちらこそ、よろしく……ボソツ母さん」

「最後の方良く聞こえなかったけど？」

「……………母さん」

「そう言えば年齢どうします？」

「見た目通り、14歳位で良いだろうよ」

「分かったわ、じゃあ正式に手続きしておくわね」

「おう、ありがとな」

「ラルゴ達にも会いに来てね」

「おう」

.

伍話

二週間後：

「先週急に決まったが、編入生を紹介する、入ってきて」

ガラガラ！

黒板の前に立ち……。

「高町イクサです、まあよろしく」

てか、今更学校かよ、ヴィヴィオと同じ学校だから良いけどよ。

回想中……一週間前

「学校？」

「そう、学校、ヴィヴィオの通ってる学校の中等部に通ってもらっけど良いかな」

「良いよ、戦いとは無関係な生活をおくりたいしね」

「じゃあ、このドリルやってみてね、それが受験勉強だし」

「ほい、了解」

「じゃあ行ってきます」

「いつてら、さて遣るかって、めっさ簡単ですよ…」

因みにこれなのはが間違えて、一学年上のを渡しているが、古代ベ
ルカ時代に賢者の称号を持つイクサには簡単過ぎである。

試験は無事パスして、編入に成功したが、何で女子が凝視してるん
だ、男子は睨んでやがるしょ。

因みにイクサ当人は気にしてないが、すれ違った10人が10人振
り向く美形である。

「先生、席は何処ですか？」

「窓側の一番後ろだ」

「ありがとうございます」

因みにこの後の授業、全て睡眠学習に費やしました。

「……お……起き……いい加減に起きやがれ!!」

「……うん、誰だお前？」

「隣の席のカイル・ハーヴェイだ、もう放課後だぞ、何時まで寝て
るつもりだ」

「起こしてくれて、ありがとうな」

「週番だからな、当然の事だ」

「そうか、まあよろしくな」

「こっちこそよろしく」

イクサが差し出した右手を掴み、握手する。

「さてと、帰るか」

「一緒に帰らないか？」

「家、何処だよ？」

「お前んちの近くだ、学校行く途中に何度見かけてるし」

「なら、明日から一緒に行かないか？」

「良いぞ、じゃあ帰ろう」

「おう！」

校門にて……

「あつ、お兄ちゃん！」

「おつ、ヴィヴィオか、今帰り？」

「うん、一緒に帰ろう！」

「ダチと約束してるしな」

「俺は良いぞ、てか妹？」

「ああ、両親が無くなったんで、親戚筋の養子になったから、元は従妹だな」

「苦労してんな」

「まあな」

「お兄ちゃん、ヴィヴィオのお友達を紹介します！ コロナちゃんとリオちゃんです！」

「ヴィヴィオの兄のイクサだ、よろしくなって、会うのは二度目かな？」

『えっ！！』

「数週間前にロストロギアの発動に巻き込まれたでしょ、あの時助けた仮面の騎士が俺だよ」

「あ、あの時はありがとうございました！！」

「ありがとうございました！！」

「お礼は良いよ、これからもヴィヴィオと仲良くしてくれよ」

『はい！！』

「最近世間を騒がしてた仮面の騎士はお前だったのか」

「そんなに騒がしてたか？」

「誰も知らない魔法体系に、正体不明だぜ、一体何者だ！？って感じだな」

「これからちよくちよく、管理局魔導士するのにな」

「そうなの！？」

「ランク空戦A+の囑託魔導士だ、やってらんないぜ」

「試験受けたの？」

「……………試験官をな、ノシた」

「は？……………はあああああ！？」

「五月蠅い」

「マジで試験官ノシたのか！？」

「マジでだ、つうか大声は周りに迷惑だぞ、ヴィヴィオ達からも関係者に見られたくないから、離れられてるし」

「ガーン！」

口で言うなよ、てか友達の人選間違えたかな？
この後他愛ない話をしながら、帰宅の途についた。

休日……聖王教会

「此処に来るのは、久し振りだな」

「何度か来た事あるの？」

「裏やぬけ道からこっそりとな、此処は親父達が眠ってる場所だからな」

「そうなんだ」

「そう言えば、ヴィヴィオが会わせたいお友達も此処に？」

「うん！ こっちだよ！」

「はいはい、分かったから」

「何かすっかり仲の良い兄妹ですね」

「ヴィヴィオからの、お兄ちゃんが出来た、という連絡はビックリしましたからね」

「そうだな」

「……イクス」

「知ってるの？」

「ああ、何度か会ったことがある」

かつて幾度となく合間みえ、そして戦った古代ベルカ・ガレアの王、冥府の炎王、イクスヴェリア。
今はただ安らかに眠れ。

「さてと、自己紹介がまだだったね、高町イクサ、ヴィヴィオの義理の兄貴だ、よろしくな、イクスヴェリア」

因みにセインには、先に自己紹介済。

「そう言えば、正体明かす前に、一度ノーヴェやチンク姉には会ってるっすんすよね？」

アハハ、どうやってノーヴェに自己紹介すっかな？

「最初の出会いがアレだったからな、会うのはドキドキだよ」

乾いた笑いで陰湿な空気に成り掛けたのを、何処かにやる。

因みに、自己紹介した時に殴りかかれたが、ヴィヴィオの取り成しで、アイス奢るので解決

高いのばかり奢らされて出費が痛い……（泣）。

主人公のプロフィール

Name・高町イクサ

旧名：イクサ・D・ゼーゲフレヒト

年齢：14歳（肉体年齢・・・精神年齢は最近体に引っ張られている。）

備考

St・ヒルデ学院中等部21B
管理局本局所属嘱託魔導士

使用術式

古代ベルカ式、近代ベルカ式

所持デバイス

*スサノオ

片刃の長剣型アームデバイス

カートリッジシステム搭載

イクサ自身のレアスキルに完全対応する様に造られた為、イクサ以外に扱えない

モード・・・？

イクサ自身の奥の手

オーバーボラザシステム

*O・I・S

魔力を消費して、自身の能力を完全解放する

*レアスキル

・聖王の剣

本来は防衛能力で、五体を武器化するという古代ベルカの戦乱の歴史の中で編み上げられた資質【聖王の鎧】、これを純粹な攻撃用かつ意識的に発動可能にした能力

自身の魔力を光る黄金の剣に変換して攻撃する

魔導士・騎士相手なら最強の盾であり最強の剣でもあるが、使い続ければ実際の剣同様に消耗する

発動させている間は身体能力が向上し、術式を見抜く眼力を得る

ノデバイス

*十二神獣【ゾディアック】

十二体の神獣を模して作られた十二個のアームドデバイスと管制用デバイスからなるデバイス

子…超振動刀テトラ
スーパーヴァイブブレード

丑…双手斧【ロムルス&レウス】

寅…分離変形刀【レーヴァテイン】

卯…星形ブーメラン【イナバ】

辰…大太刀【絶逆鱗】

巳…自在鞭【】八大蛇

午…神槍【ゲイ・ボルグ】

未…マルチプルスナイパーライフル【カシュルートの弓】

申…多節棍【如意棍】

酉…鋼翼【セイレーンの羽根】

戌…殲滅用重手甲【ヒナタ】

亥…支援工作用破壊大鎚【カンプアアの鎚】

祿話・・・練習に付き合っ

聖王教会からミッドチルダ中央市街地に向かうと、待ち合わせしていた二人を見つける。

「リオ、コロナ、お待たせ!」

「どうも、二人共!」

「ヴィヴィオ!」

「イクサさん!」

「リオは二人と初対面だね?」

「うん!はじめてまして!去年の学期末にヴィヴィオさんとお友達になりました『リオ・ウェズリー』です」

「ああ、ノーヴェ・ナカジマと」「その妹のウェンディっす」

「ウェンディさんはヴィヴィオのお友達で、ノーヴェさんは私達の先生!」

「よ、お師匠様!」

「コロナ、先生じゃないっつーの!」

「先生だよなー?」

「教えてもらってるもん」

「先生って伺ってます!」

ウェンディさんに冷やかされながら、コロナに否定を求めるが三人娘が肯定する。

「イクサも何か言え!」

「見た事無いから、ノーコメントで」

「ホラ（ハート）」

「うつせ」

移動して中央第4区 公民館のストライクアーツ練習場へ。

「久々に体動かしたいが、デバイスはまだ出来てないしな」

イクサのデバイス『スーシン』はロストログア扱いになる未知の技術「オーバーテクノロジー」を使用している為、凍結処理に。代わりになるデバイスを発注したのだ。

「新しいのは、どういうデバイスなんだ?」

「デバイスコアを移植して、俺の魔力に耐えられる仕様になるから、アームドに近いデバイスになる予定、それまではこのストレージで我慢だ」

「早く愛機が帰って来ると良いな」

「まあな、新しい名前も決めてるからな」

この後、組み手に付き合わされた、古武術だからストライクアーツだと反則とられる技ばかりなんだよな……はつきり言って面倒くさい。

.

言霊（前書き）

イクサが能力を使用する際の言霊です。短縮可能

言霊

『我は最強にして、全ての勝利を掴む者なり』

『人と悪魔――全ての敵と、全ての敵意を挫く者なり』

*雄牛

不明

*猪

『さて汝は契約を破り、世に悪をもたらした。主は仰せられる。――咎人に裁きをくだせ。背を砕き、骨、髪、脳髓を抉り出し、血と泥と共に踏み潰せと。我は鋭く近寄り難き者なれば、主の仰せにより汝に破滅を与えよう』

『猪は汝を粉碎する！猪は汝を蹂躪する！』

『さあ出でよ、ベヒモス！』

*雄羊

『立ちふさがる全ての敵を打ち破らん！あらゆる障害を打ち砕かん！』

*白馬

『我が元に来たれ、勝利の為に。不死の太陽よ、我が為に輝ける駿馬を遣わし給え。駿足にして靈妙なる馬よ。』

汝の主たる光輪を疾く運べ！』

＊山羊

『稲妻よ、稲妻よ、稲妻よ！我は百の打撃を似て千を、千の打撃を似て万を、万の打撃を似て幾万を討つ者なり。義によりて立つ我の為に、今こそ光り輝き、助力せよ！』

七

この『魔法少女リリカルなのはvivid I X A S』は打ち切り
とさせて頂きます。

なお、この小説は作者自身の戒めと未熟さを痛感させる為に残させ
て頂きます。

このような駄作をお読み下さった読者様に感謝を込めて、この話を
借りてお詫び申し上げます。

敬具

作者・楊森

以下字数稼ぎ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8871k/>

魔法少女リリカルなのはvivid IXAS

2011年6月1日21時58分発行